春 岡 村 の 伝 説

深作の氷川神社の幟（のぼり）２

今年の元旦、アーバンの遊歩道は三世代で深作の氷川神社に初詣に向かう人々が行きかっていました。いつもなら赤い鳥居の両脇に大きな幟が立てられるのですが、強風のため夜中のうちに降ろされて、見ることはできませんでした。この幟、昭和 47 年までは氷川神社のものは天保４年（1833）、同じ境内にある諏訪神社のものは天保 11 年（1840）に幕末の三筆の一人、書家巻菱湖（まきりょうこ）による書を染めぬいたものでした。そんな大家がなぜ深作村の幟の字を書いたのでしょう。

巻菱湖が書いた幟は他にも天保 11 年（1840）に大宮の大門町の氏子によって大宮の氷川神社に奉納されています。巻菱湖は 19 才のとき、郷里の越後を出て江戸に移り住んだのですが、江戸に向かう途中、中山道の大宮宿で日が暮れ、一軒の旅篭に寄りました。ところが、あまりに身なりがみすぼらしいので、粗末な行灯部屋をあてがわれました。その後、書の大家となった菱湖は、大宮の大門町から幟の字を書いてほしいと頼まれ快諾、町は大宮宿の山崎本陣を菱湖の宿に用意したのですが、菱湖は本陣には入らず 19 才の時に泊った例の旅篭の行灯部屋で揮毫しました。不思議に思った町の人がわけを聞くと、笑いながら昔の話をしたので、旅篭の主人は大いに恥じ入ったということです。菱湖は天保 14 年に亡くなるまで越後に何度か帰っていて、その際には中山道の大宮宿を通ったと思われます。

さらに大宮の氷川神社には菱湖が書いた関東一の大幟もありました。これは江戸柳橋の料理茶屋万八楼の百畳敷の大広間で書かれました。万八楼はたびたび書画会の会場になったところです。当時江戸では書画会が盛んに開かれていて、書家や画家たちの作品の展示だけでなく、目の前で書くのを見たり、作品を買うことができました。また書画会は江戸の郊外でも開かれました。

一方、深作村は大宮宿から北東へ約６キロメートル、当時の村高は大宮宿の 1292 石に次いで 1162 石と大宮地域の中で 2 番目の石高を誇っていました。村の名主で紀州藩の御鷹場鳥見役の八木橋家（JA 春岡あたり）は名字帯刀を許され、瓦葺の長屋門を構え、奥庭は江戸から深作に至るまでにある庭の三本の指に入るような素晴らしいものだったそうです。また、八木橋家は幕府の要請で長芋などの作物を扱う問屋を江戸に設けたり、勧進元となって江戸相撲を深作の諏訪神社に奉納したり、原市で開かれた書画会の開催に関わったりと、江戸文化との交流が盛んでした。そんなことから巻菱湖に依頼することになったのかもしれません。

写真は平成 25 年８月 24 日 最後のササラ獅子舞のとき

東三番街　平山由喜